

令和 2 年 7 月 3 日現在

機関番号：24201

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2019

課題番号：17K03071

研究課題名(和文) 古代・中世の重要港塩津の総合的研究

研究課題名(英文) General Study of Shiotsu, the important port in ancient and medieval times

研究代表者

水野 章二 (MIZUNO, Shoji)

滋賀県立大学・人間文化学部・教授

研究者番号：40190649

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：近江湖北の塩津は、畿内と北日本を結ぶ重要港であるにもかかわらず、ほとんど研究がなかった。2006年からの発掘調査をふまえた考古学と文献史学の協力によって、12世紀～14世紀の中世的港湾都市としての姿を総合的に明らかにした。出土した起請文木札の性格や神社祭祀のあり方、都市的な生活環境の実態などを具体的に解明するとともに、琵琶湖の水位変動に対応して、津湊が造成され、水没・移動していく過程を復原し、古代・中世の津湊の立地と環境変化について検討した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

中世の津湊は自然地形に依存した小規模なものとする通説を覆す、12世紀～14世紀の津湊・港湾都市の実態を解明できた。大規模な埋め立て工事が行われ、高さ1メートルの垂直護岸が築かれていた。津湊にともなう神社の構造や、出土した多くの起請文木札から、そこで輸送業者が行っていた契約行為が明らかになった。また木材の加工所をはじめとするさまざまな生業が営まれ、八工の大量発生やゴミ・排泄物の投棄などの都市問題が発生していたことも明確になった。

当時の津湊は自然地形を巧みに利用して造成されていたが、琵琶湖の傾動運動や降水量増大などによる水位変動により、琵琶湖の津湊が水没・移動していく実態も明らかとなった。

研究成果の概要(英文)：Shiotsu, a northern part of Ohmi, has been barely researched even though it was an important port which connects Kinai and the northern part of Japan. Thanks to the collaboration of the archaeology based on the excavation since 2006, and the philology, overview of Shiotsu as a medieval port city of the 12th through 14th centuries, has been traced comprehensively.

The characteristics of the excavated Kisuyomon wooden plates, and how the shrine festival should be, and the reality of the life style in the city, are specifically clarified. Also the process of submerging and the transfer of ports to deal with the change of the water level of Lake Biwa is restored. The Location of the ancient and medieval ports and the environmental change are studied.

研究分野：人文学

キーワード：日本中世史 塩津港遺跡 琵琶湖 起請文木札 水位変動

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

(1) 近年、日本海岸などを中心に中世津湊の復原研究が進められ、ラグーン(潟湖)などの地形条件が注目されている。津湊は自然地形を巧みに利用して造成されるが、環境変化や政治・経済の動向によって、機能が低下すれば、放棄され、移動する。そのため、特定時期の津湊の実態が確認できる事例はごくわずかで、多くの場合、大まかな地形や遺物の状況などから、おおよその位置を類推するにとどまっている。塩津は日本海岸と畿内を結ぶきわめて重要な津湊であるが、琵琶湖の水位上昇によって水没し、中世の遺構がそのまま湖底にパックされた。遺物量も非常に多く、護岸工事の具体的経過や津湊に関わる神社の実態など、多面的かつ詳細な分析が可能な唯一の事例となっている。

(2) 遺跡として津湊が検出されても、一部だけの場合が多く、塩津港遺跡のように成立から放棄までの過程が詳細にわかる事例はまれである。日本海岸と畿内を結ぶ物資輸送は、若狭・近江湖西を經由して京都へ向かうルートも存在したが、湖西の拠点津湊は、勝野津 木津 今津と変遷する。湖西では、琵琶湖の内湖に立地する形で、津湊が形成・移動したのであるが、湖北では、塩津湾の内部で適地が選ばれて、津湊が動いたと想定される。琵琶湖や日本海岸の津湊を比較検討することによって、津湊の立地や変容、放棄の原因などを、環境変化を含めた広い視点から明らかにできる。

2. 研究の目的

(1) 古代・中世社会では、北日本から畿内に向かう物資の多くは、水上交通路を通じて、越前敦賀津に集められ、陸路で近江の塩津に向かい、琵琶湖を通過して、京都へ輸送された。近世に西廻り航路が開かれるまで、塩津は畿内と日本海岸を結ぶ最重要津湊であったが、史料的制約もあってほとんど研究がなされていない。しかし2006年からの発掘調査によって、11世紀に遡る神社遺構や最古の起請文木札、12世紀の護岸などの多くの遺構・遺物が確認された。これらは琵琶湖底に水没していたため、保存状況がきわめてよい。塩津港遺跡の発掘資料整理・報告書作成と連動・協力しながら、広い角度から問題点を掘り下げ、港の造成から水没・放棄に至るまでの状況を明らかにする。

(2) 古代・中世の塩津および周辺地域に関する文献を、文書や記録・文学作品などから広く収集し、あわせて現地調査を実施して歴史地理学的な景観復原を行ない、塩津および周辺地域の歴史的な姿を明らかにする。その上で、琵琶湖の水位変動や河川環境などに注目して、津湊の立地や変遷の過程を解明する。そして木津などの琵琶湖岸の津湊や塩津街道で密接に結び付いていた越前敦賀津、その他の日本海岸の津湊との比較研究を進め、古代・中世の最重要津湊塩津の特質を総合的に解明する。

3. 研究の方法

(1) 発掘を担当した研究協力者とともに、塩津港遺跡の遺構・遺物整理の状況を確認し、遺跡のもつ特質を明らかにする。また出土した起請文木札群をはじめとする文字史料を再調査し、読みを確定するとともに、他の県内出土文字史料との比較検討を進める。あわせて各地の津湊関係遺跡の状況を整理して、塩津港遺跡の特質を検討する。また琵琶湖岸・湖底で発見された他の遺跡の整理を行ない、琵琶湖の水位変動などのデータを再検討して、琵琶湖の環境変化が津湊の立地や変動にどのように影響を与えたのかを検討する。

(2) 湖北地域は長浜市史を除けば、自治体史の編纂がほとんどなされておらず、文献史料の収集・整理は遅れている。このため、地元および滋賀大学経済学部附属史料館・長浜城歴史博物館や滋賀県立図書館などを中心に、塩津と周辺地域に関する史料調査を、研究協力者とともに

に行なう。また津湊の景観復原には、地籍図などの地図史料の収集が不可欠であるため、滋賀県庁・長浜市役所・地区公民館などで地籍図などの保存状況を確認し、調査・撮影を行なう。また古くからの重要津湊で、和歌や文学作品にも登場するため、文学関連の史料もあわせて収集・分析する。

(3) 塩津の立地や港湾・宗教施設の配置、変遷の理由などを検討するために、密接な関係にあった木津や敦賀津、日本海岸の津湊の事例を収集して、現地調査を実施し、古代・中世の津湊の特徴や環境変化などを確認する。

4. 研究成果

(1) 中世の津湊が自然地形に依存した小規模なものであったとする通説を全く覆す、12世紀～14世紀の津湊・港湾都市の実態を解明できた。湖岸は40メートル前進し、地面は2.5メートル嵩上されるなどの大規模な工事が、敦賀への道を基軸に行われ、「シガラミ」などのさまざまな工法で、高さ1メートル程度の垂直護岸が築かれた。大量の筏の鼻繰りの切り落としや木の切削屑から、木材の加工所が存在し、薄板(ヘギ板)が流通商品として、製造・販売・利用されていた事実も明らかになった。数万本もの箸や松明、輸入陶磁器・塗椀・京都系土師器皿が大量に出土し、油などの製造・販売に使用したと思われる常滑焼の大甕も多数検出され、塗師・鍛冶師・細工師などのさまざまな生業が営まれていたことが判明した。構造船の部材や多くの船釘が出土し、板作り構造船が活動していたことも明確になる。また八工の蛹が大量に出土し、ゴミや排泄物が水路や琵琶湖に捨てられるなど、すでに都市問題が発生していたことも明らかとなった。

(2) 塩津港遺跡から検出された神社遺構から、古い時期の神社の特質を解明できた。本殿からは、塩津に通じる琵琶湖を正面に眺めることができ、出入りする船を見守る津湊の神にふさわしい位置となっている。『紫式部集』で「島守る神」と詠まれた神社であった可能性が高まった。11世紀後半から12世紀初頭では、本殿の構造から、禰宜・祝などの特定の人々を中心に祭祀が行われていたと推測されるが、12世紀前半には本殿の構造は大きく変化し、同時に大型の附属建物3棟が新たに建てられ、神社境内は多くの人々が集う場となったと判断される。それまでは1尺=30センチを基本単位とした尺であったが、12世紀前半の本殿の改築や境内の変化にともない、1尺=35センチの尺が導入されたことも判明した。平安京での新たな神祭りの形式が塩津に持ち込まれ、12世紀の神社変化につながったと推測される。

(3) 出土した起請文木札から、交通・流通に関わる人々の起請文の使用実態や中世的祭祀の確立過程が明らかとなった。最古の起請文を含む大量の中世起請文木札が神社遺構から出土し、その形式が当初の無文木札から祭文木札へ、そして起請文木札へと変遷したことが想定できる。年紀が判読できる木札は、保延3年(1137)から建久3年(1192)年までの25例で、4月から10月に作成されており、日本海が荒れる冬期は塩津の港湾機能が低下したと想定される。12世紀中葉以降は起請文の書式は定型化し、神前で読み上げられて、一定期間を経て誓約が完了したのちは、刀で切断され、神社の鳥居外の堀に廃棄されたことが明らかである。勧請された神仏は、天上神と地上神にはっきり区別され、下界では王城鎮守 当国鎮守 当郡鎮守 当所鎮守という重層的な構造が明確になっており、仏教的な教義と一体となった中世的な神観へと変化する過程が解明できた。

(4) これまで研究のなかった中世塩津の歴史的特質を明らかにした。遺跡から中世的港湾都市塩津が明確になる 12 世紀は、中世荘園が本格的に確立する時期で、日本海と畿内を結ぶ基幹的津湊であった塩津や敦賀・木津はすべて王家領荘園として成立し、やがて山門の影響が強く及ぶことが明らかになった。塩津においては、交通・流通や港の支配については比叡山の権限が及び、地頭熊谷氏は権限を行使できず、居館も塩津街道沿いの集福寺集落の山寄りにあったと想定される。水位上昇によって塩津港遺跡が機能を停止したのは、あらたな津湊はより谷奥の余地区や塩津中地区まで後退して、機能し続けたと判断される。近世後半には、徐々に塩津浜地区の大坪川の河口近くへと変化し、結果的に江戸時代の港は、平安時代の位置に戻る。従来は古代以来の津湊がそのまま存続し続けると考えられてきたが、その変遷を解明できた。

(5) 津湊の立地・移動と環境変化の関連を明確にした。琵琶湖の水位は、季節的な変動とともに傾動運動や降水量増大などによる長期的な変動も大きく、塩津港遺跡からは平安時代後期から 2メートル以上上昇したことが明らかとなった。発掘された塩津港遺跡は 12 世紀頃に造成され、14 世紀の終わりごろまで使われたのち、水没する。湖西の基幹的津湊は勝野津 木津 今津と、南から北へ移動し、すべて内湖に立地した。塩津港遺跡の存続期間は、木津が登場してから水没するまでの時期とほぼ一致しており、琵琶湖全体の環境変化のなかで、津湊が変遷したことが明らかとなった。敦賀津や若狭気山津などでも、津湊の位置や機能が中世後期に大きく変化しており、能登羽咋湊などの日本海岸の津湊が、中世後期に飛砂によって埋没したことを現地調査によって確認した。

研究代表者・分担者・協力者 5 人による共同研究の成果は、水野章二編『よみがえる港・塩津』（サンライズ出版、2020 年）にまとめ、出版・公表した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計8件（うち査読付論文 3件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 笹生衛	4. 巻 別冊27
2. 論文標題 沖ノ島祭祀の実像	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 季刊考古学	6. 最初と最後の頁 p19 ~ p24
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 笹生衛	4. 巻 707
2. 論文標題 宗像沖ノ島の祭祀遺跡と古代祭祀	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 考古学ジャーナル	6. 最初と最後の頁 5,9
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 笹生衛	4. 巻 10
2. 論文標題 神道考古学から祭祀考古学へ	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 國學院大學研究開発推進機構紀要	6. 最初と最後の頁 75,93
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 水野章二	4. 巻 20
2. 論文標題 棚田と古道	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 棚田学会誌 日本の原風景・棚田	6. 最初と最後の頁 109,120
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 水野章二	4. 巻 87
2. 論文標題 琵琶湖の歴史的環境	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 河川文化	6. 最初と最後の頁 4,7
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 笹生衛	4. 巻 120-11
2. 論文標題 「中臣寿詞」の「天つ水」再考 - 「水の祭儀」論の再検討 -	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 國學院雑誌	6. 最初と最後の頁 20,42
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 水野章二	4. 巻 20
2. 論文標題 中世の風と環境 - 日本海岸地域を中心に -	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 古代日本文化センター研究論集	6. 最初と最後の頁 9,37
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 笹生衛	4. 巻 150
2. 論文標題 神道 (祭祀) 考古学	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 季刊考古学	6. 最初と最後の頁 109,112
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 2件）

1. 発表者名 笹生衛
2. 発表標題 大嘗祭の構造と歴史的背景
3. 学会等名 国際ワークショップ「古代日本の神話と儀礼」（国際学会）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 笹生衛
2. 発表標題 祭祀考古学と日本における神社祭祀の変遷
3. 学会等名 カーメン・ブラッカー女史記念講演会（国際学会）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 笹生衛
2. 発表標題 古代日本の神観と祭祀遺跡・自然環境
3. 学会等名 第13回アジア考古四学会合同講演会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 笹生衛
2. 発表標題 古代日本における祭祀の実態と神観
3. 学会等名 「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群特別研究事業第2回国際検討会
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計4件

1. 著者名 水野章二ほか	4. 発行年 2020年
2. 出版社 臨川書店	5. 総ページ数 印刷中
3. 書名 新しい気候観と日本史の新たな可能性	

1. 著者名 水野章二・笹生衛ほか	4. 発行年 2020年
2. 出版社 臨川書店	5. 総ページ数 印刷中
3. 書名 気候変動と中世社会	

1. 著者名 笹生衛ほか	4. 発行年 2018年
2. 出版社 竹林舎	5. 総ページ数 552
3. 書名 古代の信仰・祭祀	

1. 著者名 水野章二・横田洋三・笹生衛・濱修・太田浩司	4. 発行年 2020年
2. 出版社 サンライズ出版	5. 総ページ数 236
3. 書名 よみがえる港・塩津	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

